

二月末日に竣工した。強度を増すため、支えと鉄筋が多く使用された。就労延人員一〇〇人である。

以上失対工事で多くの建設、改良工事が行なわれたが、工事速度の遅いことで、生徒をはじめ学校として迷惑はした。しかし他の面では、特に費用の点では、本校は非常な恩恵を受けたといわなければならぬ。校地周辺の塀の改修をはじめ多くの工事を今後なお必要とするが、いわゆる失対工事で行なっていたことは今後とも経続したものだ。

三―a 図書館増築工事

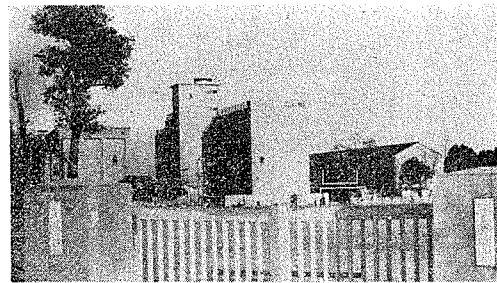
表1のごとく昭和三十二年に、製本室と二階閲覧室とが増築された。所要経費は表2の通りである。詳細は図書館課の記事にゆずる。

昭和三十年以降は、施設面では改良拡張の時期で、実に多くの



図書館二階閲覧室

工事が行なわれた。表2のごとく、兵庫県からも、本館改装その他修理費を加えると、九千万円ほどの多額の金が本校に支出されている。また芦屋市からも三百万円余が寄附されている。外部からこのように多くの経済的支援をされているが、本校育友会は、表2に土地購入費を加えて、約六千三百万円余を学校施設改善費として負担されているのである。すなわち約七年間に合計約一億六千万円の金が本校施設に投入されたことになる。(金崎)



昭和三十五年八月二十八日(日)

芦高 校長室

旧職員のおい出話

同窓会総会

出席者

神保 永夫	飯野 竹二郎
金坂 豊	魚崎 茂子
池尻 景順	福田 政次郎
三谷 直蔵	石田 貴一
阪部 由松	清水 敬治
平子 道一	前川 誠一(現校長)
岡本 仁	
司会 逸見 益一(同窓会長・一回生)	

逸見 ことしは芦高二十周年を迎えました。同窓会もこれを記念し旧職員の方を誦み昔の思い出話をお伺いしたいと思います。まず芦高創生期としての昭和二十年ごろまでの思い出を神保、金坂、池尻先生の順にどうぞ。

神保 丁度芦屋の山につじが咲き揃ったころ、第一回の新入生二五〇名を連れ芦屋天神にお参りしました。その時入学の報告と同時に学園の発展を祈りましたが、そこに集った者の心に描いていたのは、天神裏の一万何千坪かの段々になった土地に將來建てられる筈の鉄筋三階建の新校舎の光景でした。それから本校の歴史が始まるのですが、何分不自由な時代でただ学風として質実で純真であること、これがわれわれの最初にたてた目標でした。この目的にそのようなさまざまな行事が行なわれましたが、たとえば夏には水泳の練習、それがすむと遠泳大会、また時には摩耶山の宿泊訓練、冬には始業前早朝の駆足、また記憶に残っていることでは西宮の球場を借り第一回の運動会をいたしました。

金坂 私が芦中に参りましたのは創立からちょっと遅れて五月十五日でした。現在の芦高は四階建の立派な鉄筋校舎ですが、当時の

芦中も立派な三階建の鉄筋鉄骨でした。ただ現在のが自宅であるのに対し、当時は岩園小学校の校舎の一部を借りていましたので、借家住いというよりはむしろ間借り生活でした。六麓荘行きのバスに乗るとあの道路の東側に岩園小学校がありますが、あの西に面した教室、各階二教室ずつ六教室と今はない戦災で焼けた木造の旧校舎の二階一教室を借り合計七教室でした。一階は事務室と職員室でした。私をはじめ芦中に出校し事務室に行くところ、今ここにいらっしゃる三谷先生が一人事務長兼書記のようなかっこうで坐っておられました。夕方なので先生方は帰っておられたが、芦中に来てはじめてお会いしたのは三谷先生でした。当時の職員組織は山本校長先生をはじめとして今お話しする神保先生、井田先生が数学、伊藤常吉先生と私が国語、それから新谷先生が体育、それから柔道の先生でしたが当時教練を受持っておられた井上庄三郎先生、これだけでした。その後最初の年谷口先生(国画)、佐々木先生(歴史)、池尻先生(音楽)、松沢先生(博物)と一通り揃いました。私が来た当時は毎日授業といえは国語、英語、数学、体操、教練の繰返しでした。もう一つ思い出されることは運動場

れは古い者の懐古主義かもしれません。創立当時のあのスパルタ的な訓練と平行して行なわれた確固たる自由精神が芦高精神によみがえってほしいものだと思っております。

池尻 何を申しあげてよいやら、すべては忘却のかたへ消え去ってゆこうとしているといった訳ですが、ただ一つ——私は音楽の先生として音楽だけ教えておればよいのですがどうしたはずみだったか知りませんが、打出の校舎へ行ったときに一年生の習字を受け持てと言われ大胆にそれを引受けて(笑)やった訳ですが、腕に自信もなし、特別習字をけいこした訳でもなし、さっぱりどうして教えてよいやら分らぬ(笑)。まあ手本もあのころあったかどうか、それとはっきり覚えていませんが、とにかく自分の名前を正確に書くというようなことばかりやったんじやないかと記憶しています。第何回生になるのか知りませんが池尻に習字を教わった生徒諸君(笑) どうも気の毒かったです(笑)。まことに今思い出しても汗が出て来ます。思い出としてはそんなことです。校歌のことについては後に岡本先生から詳しいお話があるそうですから私はこれだけで。

逸見 さて昭和二十年打出の仮校舎全焼に

のことでした。岩園小学校の運動場が狭いで使えません。道路をさき西側の住宅地に見られるように段々になっていました。だから当時の芦中も運動場は三段か四段になっていたと思います。ここでまだ若かった私たちは生徒と一緒に野球なんかしたものです。内野は一段目、外野は二段目で守っていたことを覚えていてます。こういう状態でしたが、私たち職員はとにかく神戸一中に対抗せねばならない、神戸一中に負けない学校にしよう。これが当時の目標でした。職員はこの目標に向って一致協力していた。設備の不備と、一・二回生にはあいつまぬ言い方だが二級品の粒の悪さを人の和と鍛練で補ってゆこう、これが当時のやり方でした。だから勉強のやり方もずいぶんきびしかったものです。いまだに名物の私の小試験、これは私が三重県にいた時はやらなかったのですが、この芦中の連中をどうして鍛練するかということから考え出したものです。ポケットから紙切れを出して不意に試験をするということを。こういう訳で成績に対する評価もずいぶんきびしかったものです。一年生から二年生に上るときずい分思い切って落第させました。一騎当千の悪童どもが枕を並べて討死した様は壮観とも何と

よりこれから芦高再建への苦難時代がはじまる訳ですが、まず三谷先生、事務職員としての思い出話をご自由にどうぞ。

三谷私本校には十五年間事務屋としてお世話になりましたがこの間の二・三変わった点を話させてもらいます。昭和十五年本校創立当時、私は県の警察部の保安課にいました。山本校長から事務に来るようになると、お世話になりました。この間に感じたことは芦屋市の絶大なご協力があつたということとご父兄の絶大なご支援があつたということです。例えばご父兄で茶会という方がおられ後には有友会長になりましたが、この方が本校創立五年目に教練の査閲があつた時、学校には銃の一本も飯盒の一つもありませんでしたが、あの統制時代に五〇〇もの飯盒と水筒を大阪から自動車に積んで持ってきていただきました。本當にご父兄の協力のありがたみを感じました。また芦屋市の絶大なご協力のことですが、本校不幸にして戦災に会い当時校務になるかという矢先に、当時の阪部校長が熱心に市の当局に話されたところ、市当局並びに市民がこの現在の校舎を県に採納されやうと教育を統括することができました。もうひとつ非常に嬉しかったことは、二十七年全

も言えないものでした。このようにして二年と過ぎ三年目には打出の校舎に移ったのですが、当時のことで一つ言っておきたいことは、次第に軍国調の濃くなった時代でしたが、芦中の当時のやり方は山本初代校長、続いてお出でになった阪部校長の方針もあり、割合に軍国調の薄い自由な精神にちかわれていたように思います。この自由な精神とスパルタ的訓練があわせ行なわれていたので、理想的な学園として世間からもよく認められ出したところ、戦争がしだいにげしくなり一層に困窮にぬりつぶされた訳だが、このスパルタ的訓練による筋金の入った自由精神が中断されずずっと続いて芦高精神となっていたとしたら、すばらしい自由の学園となつたのではないかと思います。ただその歴史がでできない中に戦争がはげしくなり、一層に軍国主義にぬりつぶされたのは残念だがこれが戦後ある意味で形をかえて自由精神がよみがえって現在の芦高精神となっているのは喜ばしいことだと思います。ただ戦後のあのださくさの時に生れた自由精神であるだけに私、何かそこにまだ痕の淡いもの、もっと深く根を張った洗練された自由精神となつてほしいという気がするので。あるいはこ

国高校野球大会で植村投手をようした本校野球部が優勝した時のことです。当時飯野校長はひじょうに熱心に選手を激励援助されたのですが、同時に市民のありがたさを今でも感じております。市の商店の役員さんが学校にお出でになり、提灯行列をしたいのだが市役所に頼んでも返事をしてくれない、何とか主催者になつてもらいたいというわけ、飯野校長と相談しましたがこれはなかなか難しい問題だといわれる、そこで有友会の会長、副会長と相談したところ、有友会が主催者になりました。このことで、商店の役員さんと相談していよいよ提灯行列をすることになりました。当時提灯のない時代で、ローソクを扱うのに苦労する時でしたが、西山という新聞取次店があつてそこと連絡をとり、大阪の新聞社へ行って提灯の準備をしましたが、委託販売はしない、買取りならお世話しようというところ、そこでいくら必要か「めくら蛇におじやう」で「〇〇〇の提灯を求めましたところ、幸いみなさまのご協力で最後には破れた提灯まで全部売られました。そして午後七時校庭を出発して芦屋市内をめぐり各選手の家を附近をまわり市役所へ帰ってきた時は午前一時半だったと記憶しております。

逸見 いま三谷先生からちょっとお話がありました。私高存統の大きな原因ではなかったでしようか。

阪部 たいだい三谷さんから感激的なお話がありました。まことにあの通りでこの学校が発展してきましたのは芦屋市のお蔭とご父兄のご協力のたまものです。私はそれにつけ加えて、私が赴任した当時の山本前校長が組織された職員陣営、職員組織がすばらしかったというのを申したい。当時芦屋市には現在の教育委員会の前身審議会があり、五人ぐらゐの方々が委員で、私がその会長を命ぜられ、副会長は広瀬勝代さんでした。この審議会の席上で芦高を存続するか否かという話が出た時、四つの小学校はいたんでおり、なお中学二つを建てなくてはならない、いわゆる義務教育でない高校はなくてもよいと、というのが大方の意向であった。そこでこれはいかんと思つて、みなさんそういうことをおつしやるのは間違ひだ、みなさんのご子弟がこの芦屋市内において高校にすぐ入れる時代が来るのだからそういうことは暴論だ、と言つて孤軍奮闘したことを覚えております。焼けた学校を焼けしようというのが文部省の意向だったが、県庁にはこの芦高を何とか残

して置きたいという底意があったことを私は十分観察できました。それは場所もよいし、父兄方もしつかりしているし、何より職員組織がすばらしかったためではないかと思つております。もう一つ付け加えておきたいのですが、本山第一、第二の校舎を追われてとうとう今の丁度市庁舎前の消防署の建物一棟に八〇〇人の生徒を入れることになった時のことです。どうしてこの生徒を教えるかというわけで、三部制授業を考え出したのです。世に三部制はありますが、三部制を考え出したのは芦高の先生だと思つてます。どういふ頭のひねり方で考え出したのか、実に感心したのですが、職員スタッフがよかつたからできたのだと思つてます。生徒も従順にこれを受け

てくれました。あの一棟で三部教育を半年ばかりやりましたが、実に貴い経験でした。その時有本があの今消防自動車が並んでいる廊下で橋本を相手にビッチングの練習をしていました。運動場がないから黙認していましたが、有本のあの球威の鋭いカーブのビッチングを避けて通ることができなかつたことを覚えております。そして優勝。校舎のない芦高、しかも八〇〇人を三部教育している芦高が県下で優勝してきたということ、こういうこと

が芦高存統の大きな原因ではなかったでしようか。

逸見 では平子先生、当時の思い出は——平子 私が本校にお世話になつたのは昭和二十一年五月二十一日ごろだつたと思つてはじめて阪部先生に校長室でお目にかかつた時先生から「平子君、生徒をなくつてもらつては困る」と言われました。どういふおつもりで言われたのか分りませんが、私がなぐるように見えたのかもしれないし、むしろ私は生徒を甘やかして生徒を怒らんかいかんと思われたのだからと思つています。私をはじめて生徒に紹介されたのは本山第二小学校の講堂でしたが、その時「諸君が化学を学ぶのは化学知識を得るためではなく、科学精神を学ぶためだ」というようなことを言つたことを覚えております。私はそれまで化学ばかり教えていましたが、物理も教えよと言われ振動・波動とむずかしいところで生徒はいじめられたかもしれない。終戦当時の生徒は元気でやんちゃでした。私は愉快な教壇生活を送らせてもらいました。

逸見 戦後数年間は芦高のいわばルネッサンスだと思つてますが、校歌制定を中心に当時の学内の思い出を岡本先生どうぞ。

岡本 本校は先程からお話があつたように昭和十五年にできた訳で、第一回の卒業生を出すのは昭和二十年であり、その時には帽子の徽章と校旗と校歌、これらは三種の神器のようなもので当然学校にはなくてはならぬと思つていたが、どういふ訳か芦中にはなかつた。この理由はこれまでの先生のお話にあつた戦時態勢——昭和十九年には学徒労働員令が下る、三年生以上は学校を離れて各工場に出向くなど——が強化されたことと、自分の校舎を持つていないということ（自分たちの住む学校がはつきりきまらないと校歌制定という客観情勢が生れない）などであらうと私は思つていました。そこで第一回卒業生は校庭でゲートル着用で卒業式をやりました。当年度々空襲がありましたから、それから昭和二十年六月打出の校舎が焼け、現在の校舎のある宮川小学校に仮住いしたが、それも八月五日には焼け、十日たつて終戦になりました。私宮川小学校が焼けた時の思い出ですが、ちょうど現在の講堂をはさんで三階が全部焼け、二階は講堂の下が焼けて両袖が残つたと思つてますが、学校へ行くと阪部校長先生がゲートルをつけ、戦闘帽をかぶつて、焼けた教室の中に焼け残つた椅子を一つ置いて坐

つておられる姿を拝見しました。日露戦争の時の乃木大将が旅順港の攻撃の有様を見ておられるといつた感じでした。終戦後世の中は一変しましたが、学校も報国団組織が解体して、新しい生徒会組織に変わつてゆきました。校舎は今の海技専門と本山第一・第二小学校の三つに分かれていました。だから先生方が一団となつて会議をすることもむずかしい状態でしたが、長い間抑圧されていた教育界が終戦を迎えて塵墟の中から何か創造的意欲が熾り上るといふようなふんい気がありました。こうした空気をうつつし出してまず校友会の各クラブの活動が始まりました。一番はじめが野球部だつたと思つてます。ところが文化方面で弁論部が生徒の方からなかなか生れてこな。そこで私がおせっかいだが一つ弁論部を作つて新しい時代の弁論術を身につけるというクラブ活動が必要ではないかと説いたのですが、なかなか応募者がありませんでした。やむなく学校主催で二十一年三月十六日だつたと思つてますが、弁論大会を開催しました。私の受持つていたのは二年生だつたので、二年生のクラスに行つて、各クラスから少くとも三名出てもらう、そのほかに有志を加えてやる、という非常手段をとつたので

は各クラス一票ずつ投票権が与えられ、投票で決定することを最終的に決定しました。その結果私と浅尾孝之助先生二人の合作のものが当選したことになります。七月十五日辻女子女史を招き校歌制定発表記念音楽会を本山第二小学校の講堂でやりました。こうして一生徒の発意による校歌制定の運動が実を結んだ訳です。その二週間ばかり後にさきほど阪部校長先生が話されたように有本君をよろしうて、グラウンドのない学校として、復活された夏の野球大会に出場し、兵庫県で優勝するということが起りました。この校歌制定をめぐって私ひょろに声屋のだと思うのは、たいていの学校では校歌制定は誰か有名人に依頼して作ってもらうのですがそれを全然考えなかったということ、生徒を主体にして最初は教師は応募しなかった、しかも生徒の意見を入れて投票できめたということです。これはただ校歌制定という問題にとどまらず終戦直後から二十三年、四年ごろまで声高のいわゆる校内民主運動のたどった一つの方法ではなかったでしょうか。

逸見 では次に男女共学当時のことで魚崎先生から――

魚崎 私ちよと本校に参ります前は現在

こに自由と真理を求め教育をやりましたが私自身何かと生徒諸君にすまなかつたこともあります。たとえば一回生に博物の教師である私が数学の授業をやった記憶があります。また学校の近くの休閑地を開いては耕作をやりましたが、そのときたない牛糞を運ばせたりして本当に恥かしい記憶もあります。その後岩園から打出に移り、打出で戦災に会いその後放浪生活をする、その間の校長先生はじめ、先生方、生徒諸君の苦勞は並々ならぬものがありました。殊に昭和二十二年二月十一日だったと思いますが、市会において現在の校舎、当時の宮川小学校を原に寄付して声中の校舎にするまでの阪部校長先生のご苦心は並々ならぬものがありました。なおご父兄の絶大なご協力がございました。同時に先生方生徒諸君も一体になってやりました。戦災に会って何もない学校になるというのは本当によくよくのことでした。そういう訳で当時の記憶としてはいろいろあります。青年学校から現在の校舎に移る時のあの姿、校長先生の机を一回生の四人が持って行くあの姿、全く中心中というような形であったことをなつかしく思い出します。さて二十年から三十年の間は声高が雄飛発展した時代です。終戦直後

の御影高校にお世話になっていましたが、二十三年に学校制度が変わって共学が実施されることになり、どこの学校と共学になるかと大騒ぎしました。声高と一緒にすることになった時は、あんな柄の悪い男子校と一緒にするのはいやだと大騒ぎしました。六月ごろからはじまりながら、希望者が行なった学年もあり、声屋川から東側の者だけにした学年もあり、泣いたり騒いだりには無事に完了しましたが、とにかく十月ごろまでには無事に完了しました。その後職員との交流となりましたが、これまた大騒ぎしました。当時のこちらの教頭の福田先生が度々お見えになり、今本校にいらっしゃる辻田先生、読売新聞の名村先生それに私と三人来るようにというお話でした。当時あんな柄の悪い学校に行きたくない三人とも泣いたり、ごたごたして別寮室に入ってしまった出来で福田先生をてごずらしました。こんな訳で十月一日の赴任当日はいいやながらとぼとぼと参りました。最初はいいやでしたが、来てみると生徒の方が早く共学に慣れて仲良くしていたようにだし、私もだんだん慣れてきて、今思いつくと居心地がよかつたのかしらと思っております。

逸見 この思い出話もいよいよ声高の充実

二十一年に発足した野球部が二十七年に突って全国制覇、これは並たいていではありませんが、ことしの全国大会の時朝日新聞に戦前の優勝校の所在している府県、戦後その所在している府県を色分けにして示した図が出ていたが、兵庫県の戦後の黒い旗がのっている。これが声高の旗であると思ひ、ひじょうになつかしく思いました。やはり勝たねばなりません。甲子園から優勝して声屋まで選手諸君と大きなバスに乗り、朝日新聞の宣伝カーを先頭に帰る時のあの姿、全く凱旋將軍の味わいでしたが、本当によい時によい経験をさせてもらったと今でも喜んでおります。進学方面においてもこの期間は京大、阪大とどんでん入学した年で阪大でも兵庫県の声高について大きな理解をもち、五年間にかたって教育実習を引受けたこともあります。

確かに生徒諸君はのびのびと自由に声高生活を享受し、本当に身についた高校教育が得られたのではないかと思います。しかし反面いくらか乱暴、あまりにも自由なのではないかという見方もないとは言えません。これはエピソードになるかもしれませんが、美智子妃殿下のいとこさんにあたる現阪大総長のお嬢さんがしばらく本校におられたことが

と発展の時期に入って参ります。これから福田先生、飯野先生、石田先生、清水先生の順にお伺いしたいと思います。ただし福田先生には全体を通じてお話しただきましようか。

福田 私は十六年九月から昭和三十一年三月末まで十四年七月、約十五年間声高にお世話になりました。この間の思い出は全く制限りないものがあります。先程魚崎先生のお話にもありましたが、生徒の男女共学に伴い泉三から声中へ、声中から泉三へという交流があり、生徒が八十名余り来た訳ですが、生徒が交流するのだから先生もこの際交流しようということで、両校から三名づつ交流しました。その際両者の話し合いで、お互にこの人を、という人を選んで申込んだ場合は文句を言わないで行ってもらおうという約束ができていました。本校では魚崎、名村、辻田、の三先生に白羽の矢を立てて交渉を進めることになりましたが、結局ご本人に話をしなければというところで、私がお使に参り、魚崎先生は泣かれませんでした。中には泣かれた方もあり、困ったというよりなことも思いついた一つです。声中閉校当時から今日までを振り返ってみますと、最初のころは先生も生徒も全く一体となり、いわゆるスパルタ教育、しかもそ

あります。その前はお茶の水女子高校におられたのですが、本校に来て相当めんくらわれたらしく、その後もなくお茶の水へお帰りになりました。ともかくよいふんい気がありました。

飯野 私が声高にお世話になったのを回想すると、まことに幸せなめぐりあわせに会ったのだと思います。先程の声高受難期の先生方のご苦心を私は感謝と敬意をもって伺った訳ですが、ともかく一応不十分ながら校舎が確保でき、先生方の陣容も、阪部先生のお話にあったように、まことに立派な充実した泉下の優秀校として十分威張れるだけのものだったので、飛躍発展の時期におじやました責任も大きかったが、ひじょうに愉快な五年を送ることができました。今でも思い出するのは私の新任式の時のことです。あのころ私の声高に対する受取り方が違っていたと今でも思うのですが、声屋の土地柄からあめ色でも何でもモーニングを着ていかなければならないと、それまで長い間着ずにたんすの中に入れていたあめ色のモーニングを引張り出して着て、ワイシャツも、今から考えればダブルのふだん着ているのを着ればよかつたのですが、立カラーのひじょうにきゅうくつな、

洗濯して長い間しまっていたものを着たために、きゅうくつで首が苦しくてたまらない、新しいものといえはネクタイとカフス・ボタン、こういういでたちで演壇へあがって話を始めたところ、首が苦しくてかなわらんだから、首を横へ振ったりなんかした時、カラーがはねちゃった筈、面倒くさくなってそのまま話を話けたが、よく生徒がやじらなかつたものだと思います。くすくす笑ったりしてはいましたが、私もそうとうの心臓だとあどて思いましたが、これが私の五か年間の一つの姿でした。生徒はひじょうにおとなしい、とその新任式で思いましたが、なかなかどうして、言いたいことを遠慮なく言う、しかしスクール・カラーが緑であるように、言いたいことをのびのび言いながらも若い純真さがあり、底意地悪さを受取ったことはありませんでした。「きみらがどんなに振舞ってもし戸屋らしい上品さがある」と生徒にひやかしてよく言ったものです。先生方も、これまたなかなかすわい、言いたいことをずい分言われ、私もその代りずい分言いたいことを言って議論しました。しかし私は、こうしてくれ、という押しつけがましいことは言わなかったように思います。先生方が十分やり得

るという信頼を持っていましたから。しかし校舎だけは困ったもので何とかせねばならぬ。当時は地方財政赤字の一番困った時で金はなかなかくれない、阪部先生のやりかけておられた図書館をでっち上げたり、女子の更衣室をでっち上げたり、東の生物・芸能の教室を作ったり、講堂が台風で吹飛んだのを機会に少し広げたりするのに四苦八苦しましたが、少しでも生徒や先生方が勉強し易いよう教育の場を作ることに努力しました。さきほどお話がありました運動部でも野球部の全園優勝をはじめ、サッカー、ラグビー、テニスその他もひじょうな活躍をしたことを記憶しています。またさきほど弁論部創設の話がありましたが、弁論部でも全国大会、西日本大会で活躍した山村君、長田君、徳矢さん平さんなど立派な成績をあげたことを記憶しています。私はいつも生徒にこう言っていました。「君たちは小学校・中学校でどんな成績をとったかは知らん、あるいは一番の者は神戸へ逃げたか知らん、しかし君たちのおとさんやおかあさんは競争にうちかかってここに所帯をもって大阪や神戸ではなばなく活躍している全国でもすぐれた頭のよい人々である。だから君たちの頭の悪いはずがない、

素質が悪いはずがない、そういう自覚をもって大にやるべきである。自分の持っているものを十二分に伸ばしたら大に活躍できるのだから。私は阪部先生時代とずい分進ってひじょうに幸せな生活を送りました。生徒の前でもよくプライベートな初恋の話だとか何とか変な話をやったのですが、なつかしい思い出になっております。

石田 こうして長年本校にお勤めになった先生方と席を同じうしているいろいろな思い出話を聞いているとひじょうになつかしい思いがするときに、先生方のご苦労がひしひしと胸にしみ、十年間お世話になりながら何一つせず本校を去った私はほんとうに汗の出る思いがします。私は昭和二十四年四月新制高校の学校差解消という方針による教師の交流で県立尼崎高校から参りましたが、飯野先生も言われたように、庶民的な尼崎から戸屋という、ひじょうに上品で何か改まったような、これまでのような気分では駄目ではないか、と思いました、確かに尼崎とはひじょうに違う点がありました、自由でのびのびとして、しかも力強い野性的なものが漂っていて私の本性によく合、楽しく過ごさせてもらいました。ただ学級担任をほとんどせず

館の事務をやりましたので生徒諸君とは直接の親しみが薄かったのが一つの心残りです。図書館には林敏雄先生という優れた先生がおられ、新教育の線にそって図書館運営をひじょうに適切にやっておられ、私も先生の下で協力させてもらって図書館の仕事に情熱をうちこみました。幸い飯野、清水校長先生の深いご理解があり仕事がスムーズにゆきました。学校の規模・生徒数に比して図書館が狭いので野外の閲覧の場所を作ろうと計画し、西のけやきの下に快よい緑蔭があったので名付けて緑蔭図書館、これが二十九年ごろできたとあります。その木蔭で生徒が楽しく気持ちよさそうに読書している姿を今も思い浮かべます。もともと現在は図書館が増築されて校門西の藤棚の下に移転しておりますが、また図書館活動を全生徒に理解してもらうために図書館新聞発行をはじめましたが、号を重ね現在も続けていただいていることを喜んでおります。さて三十年以後ですが戦後十年たった三十年ころははや戦後ではなく、大学への進学ということが切実な問題として高校へ押し寄せてきました。清水校長先生がひじょうな熱意をもって生徒に勉強させるという方針を立てられ、その方向に生徒が鍛えねばなら

ないという訳でした。私自身はその趣旨を十分理解しながらも、楽しい高校生活というものを欠いてはならぬと考え、三十一年学年主任としてはじめて生徒に直接タッチすることになった時最初に、全員何かのクラブに入りクラブ活動をやれ、そしてクラブ活動と勉強を両立させれば本当に有為な人間にはなれない、青年の意気と情熱を思う存分發揮する生活をしてもらいたい、と説きました。私も暇な時生徒と一緒にラケットを握ったり、バレー・ボールのボールを打ったりしたことを思い出します。自治会活動、これは芦高の誇るべき伝統です。現在高校の生徒会活動が低調になり勝ちなことは寒心にたえませんが、学校によると学期毎に役員が交代したり、三年生はほとんど役につかないという所があるようです、芦高の自治会活動の盛んなことは恐らく県下のトップではないでしょうか。この受験の激しい時代に自治会活動をこれだけ活発にやっている学校は珍らしい、しかも進学率も年に優秀になりつつあるのはスクールの大きい人間を養成しているという点で私は芦高の持つ大きな誇であると思います。私はこの自治会活動がどんなに卒業生に大きな思い出、芦高への大きなつながり、愛校心を養っ

ているかということも芦高を去ってしみじみ感じております。卒業生が芦高はよかった、楽しかったと言っているのはやはり自治会活動を通してではないでしょうか。私の学年にもいろいろな役員になってくれる生徒の中には、この生徒が役員になれば進学はどうかと心配な者もありましたが、進んでかって出てくれ、三年間実に立派な活動をしてくれました。今もそれが大きな思い出となっております。将来芦高が時流に流されないので、正しい高校生活のあり方を堅持して、のびのびとした、しかもその中にしっかりと見識を持った有為な人物を出してほしいと思えます。私たちは卒業する生徒と一緒に相談して校庭に樹木が少いからみんな木を植えようというところで、運動場の周囲に銀杏と楠を植えましたが、この木が茂ってゆくように、芦高もますます充実して、内容・外観ともにすばらしい学校になってほしいと願う次第です。

清水 私は師範教育に長年従事していて、高校長は竜野と加古川東と戸屋と三校を経た訳ですが、加古川東からここへ来てまず感じたことは、さすが場所柄生徒諸君は洗練された立派な点が多いが、かつては兄弟相交わるというような、神戸一中と並んで進んでいた

ような学校から多少進学の点で後退している
ということ、またいわば芦高打倒という訳で
周囲の学校もなかなかしつかりやっている
ということでした。そこで私は、さきほど石田
先生もちょっと言われたが、第一に学生の本
分である勉強をしつかりやれ、芦高本来の精
神の上に立つて、金坂先生の言われたスプレ
タ精神、というのはどうかと思うが、とにかく
自由の上に秩序と規律をしつかり守って、
その上学業に精励せよ、勉強するということ
はあらゆる面の人間形成の基礎になるのだか
ら、というようなことを力説しました。本来
の芦高の上に勉強に精励することを加えても
受験学校になるような心配はないし、またそ
れだけの業地はできているのだから、と言っ
たのですが、これには抵抗もあったようで、
半分理解してくれないようでした。しかし前
川校長のお骨折りで上級学校進学者の数も逐
年上昇しているの聞き、私快哉を叫んでいる
者の一人です。第二に、飯野校長も嘆かれて
いたが芦高の設備、施設の面のことです。私
は天下の芦高がこんな学校では、と言うと、
そその者が注意して、いや、この学校をもち
ろうのには大変なことだったから悪いなど言
ってははいかんと言われたが、ともかくこのま

までは困ると思ひ、飯野校長の初志を受け継
いで、体育館なども〇〇円ずつ貯金してお
られたようだが、どうしても第二校舎を改築
してもらわねばならぬという訳で、幸い宮下
予算係長や財政部の者、県会議員の渡辺さん
などの協力を得て芦高新築に踏み出しまし
た。第一期工事が完了した後前川校長が引受
けてくださった、二十周年を期して四階建校舎
が完成すると聞き大変嬉しく思っておりま
す。こうして学業に精励することと校舎の設
備充実という二つの方針を根幹として私は三
年足らずの短日月を送りました。職員各位も
優秀で、飯野校長の言ではないが、ずい分議論
したが大体そういう方向を取り、生徒諸君も
記念祭を伝統的に尊重していて、不機嫌な者
もあつたようだが、充実して日を短縮せよと
も、休日を利用してよとかで進んできました。
例の遊女の高尾が仙台へ送つたてがみに
「忘れねばこそ思い出さず候」とありますが
私芦屋市教育長という仕事の関係上空間的に
も時間的にも思い出といつてもへだたりを感
ぜず、現実と一緒にあります。現在の日本の
状態を考えますと、自己に沈潜し自己を深く
掘り下げて、芦高の在校生・卒業生諸君こそ
古い吉田松蔭のことはではないが、新しい

日本のいしずえ、みきとなつていただきたい
「陋村といえども」ということばがあるが、
芦屋は決して陋村ではないが、中心となつて
立派な町を、国を作つていただきたいと思ひ
ます。殊に現在の暴力の問題、その暴力行為
者の年令が下がつていくことなど、五等國か六
等國か敗戦國か知らぬが、婦女子が夜道歩き
もできぬという現状、いろいろ考えますと、
私もはじつとしていられぬ気がします。芦
高の在高中生・卒業生諸君が中心になつてわが
国に秩序と規律を確立し、大きな理想を描い
て進んでいただくことを心から念願する次第
です。
逸見 思い出も現在に帰ってきました。こ
うして諸先生のお話をお聞きして、私芦高出
身者であることに今さらのようにしみじみと
誇りと喜びを感じました。同窓生一同を代表
して感謝いたします。いま清水先生からお話
があらましが、私たちが芦高卒業生として
恥づかしくないよう、各分野でしつかり頑張
りたいと思ひます。では最後に現校長先生に
ひとこと挨拶いじたいと思ひます。
前川 きよはは珍らしく歴代の校長先生、
初代の山本先生は遠方でお出でいただけませ
んでしたが、二代の阪部先生、三代の飯野先

生、四代の清水先生とお揃いで一堂に会して
いただき、また、本校の教育の発展にひじょ
うなご努力をいただいた諸先生に多数お出で
いただき、いろいろな時代の思い出、苦心談
を伺い私どもひじょうに啓発され、また感激
を新たにした次第です。今日の芦高を築いて
いただいた諸先生のご苦労、ご苦心を私長く
胸に刻み、ご努力を空しくしないような本校
の発展を期さねばならないと思ひます。私本
校に着任して最初に「芦高十五年史」を読み
ました。現在を理解するためには歴史を知ら
ねばならないと思つたからです。きよははそ
の歴史の文字でなく、生きた先生方に直接お
目にかかつていろいろお話を伺つた訳で、ひ
じょうに感激を強くした次第です。ちようど
ことは本校の二十周年に当りますので二十
周年記念史を出したいと思つていますが、き
よははその有益な資料を提供していただいた
訳で、先生方に厚くお礼申し上げます。先生
方は現在ほそれぞれの方に活躍なさつてい
る訳ですが、かつて本校に縁のあつた方々で
こんご直接間接にご指導、ご鞭撻をお願いし
たいと思ひます。ありがとうございます。(拍手)

丸茂喬教諭急逝される

昭和三十五年七月より神経性高血圧症により阪大付属病院にて療養のため欠勤中
の丸茂喬教諭は一時回復のため自宅にて療養されていたが病勢急変により三十六年
一月十四日急逝された。翌々日十六日自宅にて告別式が行なわれた。その日の授業
は午前中とし、全職員、生徒有志が告別式に参加した。
先生は本校に二十四年、市立西宮高校より転任され化学教官として生徒たちを親
しく指導され、また昭和二十九年三月卒業生（九回生）の学年主任としての任にあ
たられ、また本校野球部長として本校野球部のあの黄金時代、植村、石本の、パッテ
リーを擁して全国優勝をとげた当時陣頭で指揮をとられたのであった。また教務課
長として教科過程の編成に苦勞され、二十九年四月より就職指導課長として三十年
以後の（卒業生）希望の就職は全部先生のお世話になつたのであった。丸々した頭
赤味のあつた顔、にこやかなテキパキした動作、親しみあり、また実直な先生は全
職員、全生徒より親しまれ畏敬されていた。急逝の報を聞、職員、生徒は悲しみと
驚きに瞬時を過ごしたのであった。